様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００５０８

研究課題名（和文）断絶と継続の中欧文化における「特性のなさ」をめぐる研究

研究課題名（英文）Research on concepts 'qualitylessness' in Central European culture between discontinuity and continuity

研究代表者
桂　元嗣（KATSURA, Mototsugu）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：４０６１３４０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現在の中欧文化研究においてR・ムージルのカカーニエン概念を適用することの妥当性を、ムージル文学の主要概念である「特性のなさ」を分析しつつ検証するものである。当初の予定ではムージルと同時代のユダヤ系作家の思想とムージルの主要概念とを比較しつつ研究を進める予定だったが、2020年以降のコロナ禍の影響で思うような資料収集と研究活動ができなかった。そのため、すでに資料の揃っている1920年代のムージル作品（特に『三人の女』）や『特性のない男』の草稿調査を中心とした研究に切り替え、「特性のなさ」という概念が形を成すまでの思想的変遷を主に作品生成論的に分析し、研究成果を論文や口頭発表で公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究のうち、2021年発表の論文は、2016年に刊行が開始された新版ムージル全集の編集上の問題を日本で初めて紹介した論文である点で学術的意義がある。また、『特性のない男』の草稿における編集上の問題について、日本における編集文献学の拠点である国際編集文献学研究センターで発表できたことは、他領域の文学研究と同様の問題意識でムージル研究を推進する可能性を提供できた点で社会的意義がある。
本研究はムージルの「特性のなさ」という概念が形成される過程を検討し、「無定形性」などの重要な概念や、文学技法としての比喩との関係を論じたが、研究成果の一部を一般書で平易に説明できたことも社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：This study examines the appropriateness of applying R. Musil's concept of kakanien in current Central European cultural studies by analysing the key concept of ' qualitylessness' in Musil's literature. The original plan was to carry out the research by comparing the ideas of Jewish writers contemporary with Musil and Musil's main concept, but because of the Covid 19 after 2020, it was not possible to collect as much material and carry out research activities as expected. Therefore, I switched to a research focusing on draft surveys of Musil's works from the 1920s (especially “Three Women”) and “The Man Without Qualities”, for which I already had a good amount of material, and analysed the ideological transition of the concept of ' qualitylessness ' as it took shape, and published our research results in articles and oral presentations.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学　オーストリア文学　中欧　ムージル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2016 年度～2019 年度の科学研究費助成事業による研究（基盤 C：16K02574）において、中央ヨーロッパの、主にユダヤ系の作家たちが共通して描く「どこかの風景であるかもしれないような、可能性としての」中欧の風景における「特性のなさ(Eigenschaftslosigkeit)」に着目した。それにもとづき本研究では、長編小説『特性のない男』の作者ムージルにとっての中欧を意味する「カカーニエン」と、彼の作品の中心概念である「特性のなさ」との関係を、特性を放棄し、「白紙の状態」になろうとした 19 世紀後半以降のユダヤ系作家の作品と比較することで明らかにする必要があると考えた。これは非ユダヤ系作家であるムージルとユダヤ的思考との親近性が従来から指摘されつつも、十分な研究がなされていないという事情が背景にある。

２．研究の目的

本研究の目的は、旧ハプスブルク諸国というヨーロッパの広い領域における多民族・多言語的枠組みをムージルの「カカーニエン」というトポスでとらえようとする近年の試みの妥当性を、第二次世界大戦から現在に至るまでの文化的状況の変化を含めて検証することにある。

特に以下の 2 点を本研究課題の中心的な問いとして挙げた。

1. 現在の中欧の多文化的状況を、過去の状況との断絶／継続をふまえていかに分析するか
2. ムージルの思想はユダヤ人による「特性のない」文化の影響をどれだけ受けているか

３．研究の方法

本研究は既存資料や文学テクスト、中欧文化圏で申請者が収集する史料を「語り」や「翻訳」といった文学的手法を用いて分析する。研究開始当初、調査分析を行う研究項目は以下の 4 点であった。

①戦間期ウィーンの反ユダヤ主義に対するムージルの反応の分析
②ムージルのエッセイスムスとユダヤ系作家の「小さな形式」との比較
③ムージルの「特性のなさ」と同時代のユダヤ人作家における「特性の放棄」との関連
④戦後ウィーンの復興とユダヤ文化抹消との関連

ただし、2020 年 3 月以降のいわゆるコロナ禍による影響により、4 年の研究期間の半分にあたる 2020 年度、2021 年度は海外渡航ができず、ムージル文学の比較対象として想定していた同時代のユダヤ系作家（H・ベッタウアー、A・ポルガー、F・トーアベルク、モルナール・F、E・ロタールなど）についての資料収集や現地調査を十分に行うことができなかった。そのため研究項目の内容を大幅に変更せざるをなかったが、研究項目①②については主にムージルの 1920 年代の短編小説集『三人の女』（「トンカ」「ポルトガルの女」）の表現形式や未完の長編小説『特性のない男』の草稿を分析することとし、研究項目③④については上記のムージル作品の生成論的な研究に加え、研究分担者として助成を受けている冷戦と文学に関する科研費課題（基盤 B：20H01247）で主に研究している作家 M・ドールや、彼と交流のあった K・M・ガウスおよび P・ツェラン、I・イヴァニ、D・キシュらユダヤ系作家についての研究を継続的に進めることにした。

４．研究成果

（1）ムージル作品の比喩表現のもたらす「全」的把握と「特性のなさ」概念との関係：特にムージルの短編小説「トンカ」(1922)に関する研究について

K・コリーノ(2003)による従来のムージルの伝記研究において、ムージルの 1900 年代の日記の記述を根拠に実在しているとされている主人公の恋人トンカのモデル、ヘルマ・ディーツの存在の自明性に疑問を呈し、実在の根拠とされる日記の記述はムージルによる文学的虚構ではないか、という仮説を立てた。そのうえで日記の説明的な記述とは異なる、比喩を用いた小説の詩的・絵画的な表現手法において、トンカの存在を特定の先入観でとらえるのではなく、いわば「全体」として把握させることが、1920 年代のムージルが取り組んでいた文学的方法であり、またヘルマのような中欧の歴史の片隅で消え入りそうな小さな声をすくい取ることにつながるのではないかと結論づけた。「トンカ」において明確に示される比喩表現のもたらす「全」的把握は、ムージルのリルケ追悼講演(1927)で展開される比喩論においても「特性 Eigen-Schaften」を超えた「全性 Aller-Schaften」という形で言及されており、これが同時代に具体化しつつあった「特性のなさ」という概念形成にも影響を与えていると考えられる。

以上の研究成果を共著『人文学のレッスン』（小森謙一郎ほか編、水声社、2022 年）にて発表できたことは、自らの研究内容を平易な言葉で大学生を含む一般読者に伝えることができた点で、今後の研究をより広い読者層に向けて展開していく契機になったと考える。

（2）『特性のない男』の生成過程と「無定形性」概念との関係：特に「スパイ」構想、短編小説「ポルトガルの女」(1923)に関する研究について

『特性のない男』のタイトルに「特性のない(ohne Eigenschaften)」の語が用いられる以前の1920年代の構想には、「スパイ」「救済者」「双子の妹」などのタイトルが与えられており、いずれも『特性のない男』へ至る要素がみられるものの、それぞれの草稿によって中心となるテーマは異なる。本研究では主に「スパイ」構想時の草稿がどのように構成されているかを2016年より刊行が開始された新版ムージル全集を取り上げながら編集文献学的な立場から検討しつつ、同時期に構想されていた「ポルトガルの女」の前段階において「動物寓話集」なる小文集が構想されていたことに着目した。当時のムージルは蝿、猿、馬など、さまざまな動物の観察を通じて人間の存在のありようを記述しようとしているが、本研究ではなかでもM・メーテルリンクの『蜜蜂の生活』(1901)の影響を受けていたことを明らかにしている。ムージルはこの書物で描かれる半ば個体として生き、半ば「巣の精神」と呼ばれる全体の論理に盲目的に従うような蜜蜂の生態に着目し、これを「半端な個体」と名づけた。これが第一次世界大戦を契機に戦争へとなだれ込んでいったヨーロッパの人々の「無定形性(Gestaltlosigkeit)」についての考察へとムージルを導き、長編小説における「特性のなさ」概念にも影響を与えていたのではないかと考察した。

上記の研究成果のうち、新版ムージル全集の編集上の問題については、『武蔵大学人文学会雑誌』第52巻第3・4号（2021年）において研究成果を公表した。「スパイ」構想時の草稿についての研究は、2022年10月の国際編集文献学研究センター（成城大学）主催のセミナーにおける招待講演として発表し、同研究センターの機関誌『編集文献学研究』vol.2（2024年度刊行予定）において査読論文としての掲載を予定している。また「ポルトガルの女」についての研究は2023年11月の日本グリルパルツァー協会研究発表会（金沢大学）において口頭発表をおこなった。こちらについても論文として発表を計画している。

（3）戦後ウィーンにおけるユダヤ文化抹消の過程と「中欧」概念との関係について：特にM・ドールの自伝的小説とエッセイに関する研究について

研究分担者として助成を受けている冷戦と文学に関する科研費研究（基盤B：20H01247）の成果として計上している論文(2022)では、第二次世界大戦後間もないウィーンで活躍した旧ユーゴスラヴィア（現セルビア）出身の作家M・ドールの自伝的三部作（『ライコウ・サガ』）および彼の自伝的エッセイを取り上げ、大戦中にナチスドイツに抵抗するパルチザンとして仲間と活動していた際の「けっしてひとりでない」という感情が、戦後のウィーンでの孤独な生活を通じて次第により大きな故郷としてかつての多民族国家ハプスブルク帝国の中心であったウィーンに対する特別な感情へと変化していく過程を、彼の小説における自伝的な語りの構造を分析しつつ明らかにした（なおこのドイツ語論文は第21回日本独文学会・DAAD賞(2024)を受賞している）。

本研究では上記の研究成果をふまえつつ、また2016年度～2019年度の科学研究費助成事業による研究（基盤C：16K02574）の成果である単著『中央ヨーロッパ―歴史と文学』（春風社、2020年）の内容を発展させつつ、P・ツェランやR・フェーダーマンらユダヤ系作家と交流し、非ドイツ語圏からウィーンでドイツ語作家としての地位を確立させていく過程でドールが展開した「中欧」概念を、D・キシュら同じ旧ユーゴスラヴィア出身の作家、あるいはM・クンデラなど同時代の作家による中欧概念、さらに室内空間という身の回りの小さな世界から中欧の多様性をとらえ直そうとするK・M・ガウスのエッセイ(2019)と比較しつつ研究を進めた。また、上記研究の社会的背景を把握するために、セルビアのベオグラード、ノヴィサドにて基礎調査を行い、さらにオーストリアが独立を回復する1950～60年代にウィーン市長を務めたF・ヨーナスによる戦後復興政策と、その結果として生じたユダヤ文化抹消の過程、さらに中欧におけるホロコースト前後で生じた中欧世界の文化的断絶との関連を調査するための資料を収集した。以上の研究については本研究期間内で具体的な成果を出すことができなかったが、これからの研究に生かすべく、引き続き調査を行いたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 桂　元嗣	４．巻 第52巻第3・4号
２．論文標題 「構成的イロニー」再考―新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『武蔵大学人文学会雑誌』	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 桂元嗣，北島玲子，原基晶，伊藤博明，松田隆美，井出新
２．発表標題 ムージル『特性のない男』の編集をめぐって：読みやすさと学問性の両立は可能か
３．学会等名 国際編集文献学研究センター主催 第1回セミナー・第2回シンポジウム（成城大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 桂元嗣，早川文人
２．発表標題 「半端な個体」の結婚飛翔―ムージルの動物寓話集構想と『ポルトガルの女』
３．学会等名 日本グリルパルツァー協会研究発表会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 小森謙一郎・戸塚学・北村紗衣編	４．発行年 2022年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 319
３．書名 人文学のレッスン　文学・芸術・歴史	

１．著者名 畠山　寛、吉中　俊貴、岡本　和子	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 268
３．書名 ドイツ文学の道しるべ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関